Akita University

研究報告：秋田大学医学部保健学科紀要18(2)：68－73，2010

補助教育として福祉住環境コーディネーター２級取得をとりいれて

金　城　正　治

要　　旨

作業療法での住宅・福祉用具への関心を広げ，教育目標を効果的に達成するため，平成17年度より専門教育と並行して，希望者に住環境コーディネーター２級資格取得受験を補助教育としてとりいれた．

平成17年度から20年度までに学生の94％が受験し．ほぼ100％の合格率であった．受験学習は，短期集中で実施するためグループ学習で実施した．

そこで，この補助教育の効果を検討するために，平成17年度から19年度の受験者50名にアンケートを実施した．その結果，61％が講義や臨床実習で役立つ．また，資格受験なので少し学習負担がある．94％の学生が住まいへの関心も高くなった．しかし，受験するためのグループ学習は良かった51％，あまり良くなかったが21％いたので，学生の勉強法の配慮，進行についてもう少し介入するなどの検討も必要であった．

作業療法教育の中で，福祉住環境コーディネーター２級受験の取り入れは，教育効果も高くなることが示唆された．

１．はじめに

福祉住環境コーディネーター２級の試験に，毎年700名前後の作業療法士が受験しており，2009年度は789人が受験している[1]．作業療法の業務の中で住宅改修や福祉用具の位置づけは大きい．

箕輪[2]らは，東京都における住宅改修アドバイサー制度の実施状況で，理学療法士，作業療法士が住宅改修や福祉用具の相談に応じていると述べている．また，厚生労働省老健局長通知老発第0609001号[3]でも，福祉用具．住宅改修事業において，介護支援専門員または作業療法士，福祉住環境コーディネーター２級以上などの資格を有するものが書類作成者であると通知されている．よって，養成教育でも住宅改造や福祉用具の学習も重要となる．

しかし，大学教育カリキュラムでは，福祉住環境コーディネーター２級レベルの内容を獲得するには，日程や時間が十分に取れない．これが卒業後の受験につながっていると思われる．そこで，資格獲得の目的とともに，住環境の講義の復習やまとめ，実習前の疾患のまとめ，資格取得による住まいへの動機づけ，そして，お互いに教えて学ぶグループ学習を目的に，この資格受験を補助学習としてとりいれた．

大学における資格・検定取得支援について，河野[4]は．1990年以降広まり，大学と資格・検定の取得や知識・技能の習得を目的に専門学校へ通うダブルスクールも生まれ，私立大学受験生も大学選択時の指標として資格取得も重視していると報告している．そして，福祉住環境コーディネーター２級取得を大学案内に資格・検定講座として掲載している大学もあると報告している．作業療法学専攻は作業療法士の受験資格を取得できるが，福祉住環境コーディネーター２級資格の取得を取り入れている大学教育の報告はない．

今回，作業療法専攻３年次学生の専門教育と並行して平成17年度より補助教育として福祉住環境コーディネーター２級資格取得をとりいれた．この補助学習の教育的な効果を検証するため，平成17年度から19年度に受験した学生50名に，アンケート調査したので報告

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻作業療法学講座

Key Words:　作業療法教育
資格・検定取得教育
住環境コーディネーター２級

Akita University

する．

２．当作業療法学専攻の住宅等に関連するカリキュラムと福祉住環境コーディネーターの位置づけ

２年前期の生活活動学でバリアフリーの概論について学び，２年後期の生活支援技術学で日常生活活動について学習した．そして，３年前期の生活支援技術学実習のなかで，住宅について基本的な概論，住宅改修方法，間取り図など図面描画演習を２コマ実施した．３年後期の生活活動学実習では障害をイメージして住宅改造演習を１コマ実施した．平成21年度より生活支援技術学実習の教科書として，「福祉住環境コーディネーター２級公式テキスト」を指定した．

福祉住環境コーディネーター２級は民間が認定する資格で，毎年７月と11月に試験があった．受験方法は，平成17度と18年は11月に受験し，平成19年以降はより教育効果を高めるために７月に受験した．学習日程はどちらの月の受験でも受験日14週目より開始した．平成20年度の実施日程では３年前期の生活支援技術学実習の補助教育として講義開始の週より始めた（表１）．

グループは４から５名の人数として，教員がランダムに編成した．そして，進行例に従って時間，分担，場所などの計画をグループでたてた．グループ学習ではお互いに教えて学ぶことを原則にした．各学生が分担して調べたことを週１～２回の頻度で，１回につき平均２時間程度学内でグループ学習をした．日程としては13週から７週前まではテキストの分担学習，６週から４週までは練習問題，３週前から試験日までは個人学習とした．模試の日時だけは最初から決めた．この学習での教員の関わりは，勉強法，模試，質問への回答などをした．

グループ学習で実施したのは，受験までの短期集中学習と広汎な知識を共有するために実施した．そして，資格取得も重要であるが，大学教育の中での目標達成型のチーム学習を身につけることも意図した．

４．調査方法

福祉住環境コーディネーター２級の受験については，３年生を対象に，住宅改修の目的と福祉住環境コーディネーター２級の意義と目的を説明し，受験希望者を募った．平成17年度から20年度までに69名（94%）が受験した（表２）．

表１　住環境コーディネーター２級受験学習日程

試験日までの週		進行例	学習方法	勉強と模試日	内　容
14週	４/７－４/10	計画	グループ学習		学生で分担決定
13週	４/11－４/17	第１・２章	グループ学習		グループ勉強（第１・２章）
12週	４/18－４/24	第３章	グループ学習		グループ勉強（第３章）
11週	４/25－５/１	第４章	グループ学習		グループ勉強（第４章）
10週	５/２－５/８	振り返り	個人学習		
９週	５/10－５/15	第５章	グループ学習		グループ勉強（第５章）
８週	５/16－５/22	第６章	グループ学習		グループ勉強（第６章）
７週	５/23－５/29	まとめ	グループ学習		グループ勉強（参考資料）
６週	５/31－６/５	練習問題	グループ学習	６/１（火）午前	模試①，復習
５週	６/６－６/12	練習問題	グループ学習		
４週	６/13－６/19	練習問題	グループ学習	６/15（火）午前	模試②，復習
３週	６/20－６/26	確認．練習	個人学習		
２週	６/27－７/３	確認．練習	個人学習	６/29（火）午前	模試③，復習
１週	７/４－７/10	確認．練習	個人学習		
	７月11日（日）		試験日		

表２　受験者数と合格者数

受験年度	学生数	７　月　受　験			11　月　受　験		
		受験者数	合格数	全国合格率	受験者数	合格数	全国合格率
平成17年度	16	—	—		13	13（100%）	48.9%
平成18年度	19	—	—		19	19（100%）	58.6%
平成19年度	19	18	8（44%）	19.2%	10	10（100%）	23.9%
平成20年度	19	16	13（81%）	48.7%	3	3（100%）	66.2%

Akita University

この補助学習の教育効果を検討するために，平成17年から19年の受験者全員50名対して，年度ごとに，４年次の臨床実習終了後に同意を得てアンケートをとり，43名が回答した（回答率86%）．アンケートでは，①この受験学習は講義や実習に役立ちましたか，②この受験学習は負担でしたか，③試験内容は難しかったですか，④住まいに関心がもてましたか．⑤補助学習としてあってもよいですか，⑥グループ学習はどうでしたかなどについて，五者択一と自由記述形式で実施した．

５．結　　果

学生の福祉住環境コーディネーター２級試験合格率は，表２に示すように平成17年は学生数16名中13名が受験し，11月受験で全員合格した．平成18年は学生数が19名で全員受験して，全員合格した．

平成19年より前期の講義と同時平行的に進めるために，11月から７月に受験することにした．平成19年は学生数19名中18名が受験し，７月受験で８名が合格し，不合格者10名は11月受験で合格した．この年は全国合格率も７月受験で19.2%，11月受験で23.9%と低くかった．平成20年は学生数が19名で全員受験をし，７月受験で16名が合格し，不合格者の３名は11月受験で合格した．

平成19年と20年の７月受験不合格者の11月受験は，人数が少ないのでグループ学習でなく個人学習をして受験した．不合格者の一部学生の聞き取りでは，「試験日の体調不良のため欠席した」，「勉強不足」，「勘違い」などの意見があった．

受験を希望しない一部学生の聞き取りでは，「受験費用（6300円）が高い」，「福祉住環境コーディネーター２級公式テキスト（4800円）が高い」，「試験日に用事がある」，「関心がない」などの意見があった．

アンケート調査結果として，この受験は「講義実習に役立ちましたか」の設問で，非常に役立ったが５名（12%），まあまあ役立ったが21名（49%），普通が14名（33%）であった．非常にとまあまあ役立ったをあわせると約６割が役立ったと回答していた．自由記述では，「疾患のまとめや復習」，「評価実習や臨床実習で使えた」．「その後の講義が理解しやすい」，「住宅改造の案作成で使えた」等があった（図１）．

「この受験学習は負担でしたか」の設問で，非常に負担が８名（19%），少し負担が22名（51%），普通が８名（19%）でした．自由記述では，「実習やレポートが重なり大変であった」との回答があった．（図２）

「試験内容は難しかったですか」の設問で，不合格になって再度受験して学生もおり重複回答もあるので回答数は54となった．非常に難しいが３名（６%），まあまあ難しいが19名（35%），普通が29名（54%）であった．（図３）

「住まいへの関心度」の設問では，非常に関心がもてたが12名（27%），まあまあ関心がもてたが30名（67%）であった．（図４）

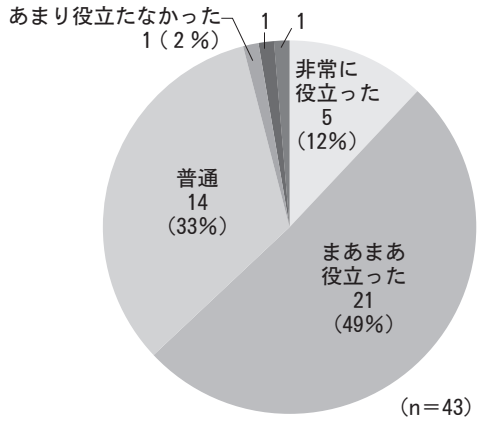

図１　受験は講義や実習で役立ちましたか

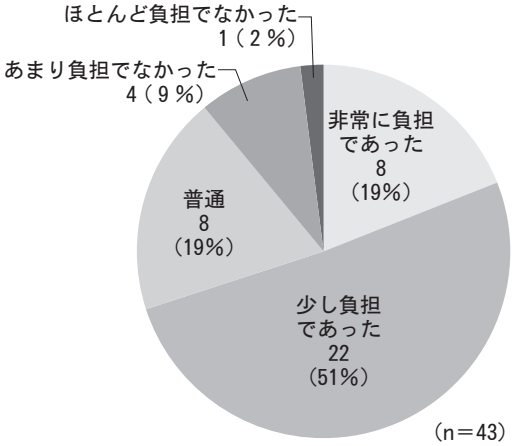

図２　この受験学習は負担でしたか

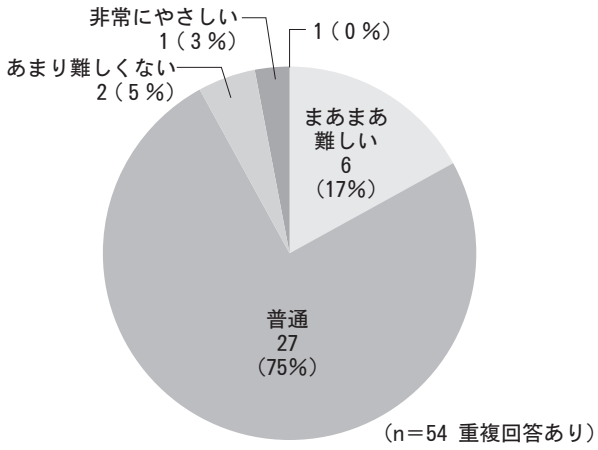

図３　試験内容は難しかったですか

Akita University

この受験は「補助学習としてあってもよいか」の設問で，あったほうがよい34名で77%であった．なくてもよいが１名で．わからないが９名で21%であった．(図５)．

「グループ学習はどうでしたか」の設問で非常に良かったが２名（５%），まあまあ良かったが20名（46%），普通が９名（21%），あまりよくなかったが９名（21%）であった．自由記述でも３つの群に集約でき，一つは「お互いに協力でき刺激があった」などの肯定的な記述，２つめは「集まる日時や進行がうまくいかなかった」ので不十分．３つめは基本的に「個人勉強がいい」との回答があった（図６）．

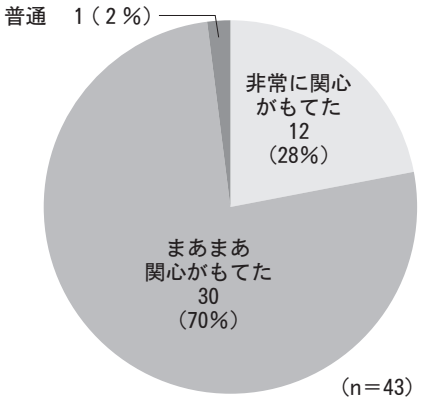

図４　住まいへの関心がもてましたか

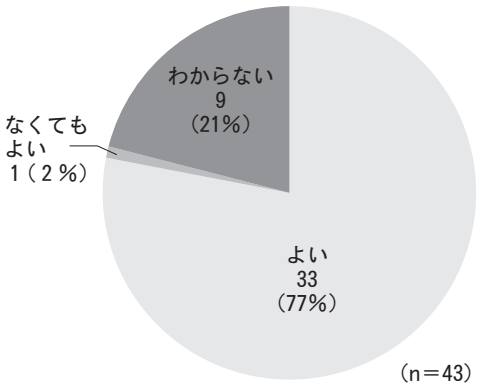

図５　補助学習としてあってもよいですか

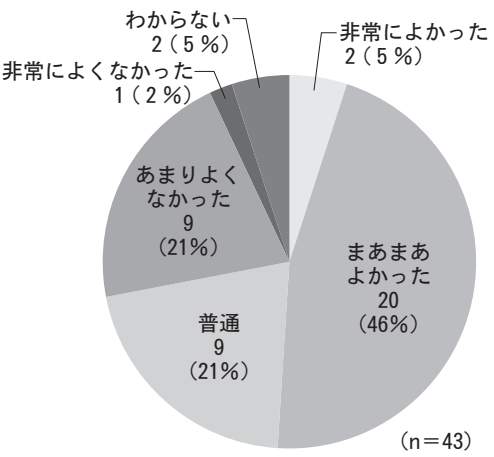

図６　グループ学習はどうでしたか

グループ学習の進行がうまくいかなかったグループは２つあった．理由としては，「一部の学生が担当した箇所をまとめてない」「大学内での勉強にこない」などがあった．これらグループの学生からの相談には，グループ内で現状を話し合うように指導した．問題は一部改善もされたが，最後まで十分には解決されなかった．グループ学習は継続されていた．このグループ学習がうまくいかなかったグループ学生の合格率が悪いということには直接結びついていなかった．

６．考　　察

作業療法学専攻は，作業療法士の受験資格をとることができるが，更に知識や関心を高め，グループ学習の利点をいれた課題達成教育を達成するために福祉住環境コーディネーター２級の資格取得をめざした．

河野[4]は，大学における資格・検定の取得支援が行われる背景として，①学生・受験生のニーズ，②政策動向，③学習到達目標としての期待，④学習スキルや自信の獲得への期待，⑤就職対策としての自主性など行動特性，基礎学力の証明，⑥能力を可視化する風潮があると述べている．そして，私立大学の文科系に学部では，簿記，コンピュター関連，語学関連に資格・検定が多いとしている．福祉住環境コーディネーター２級を資格検定講座として大学案内に掲載している学校が48校あるとしている．

工学部等においても，丹羽[5]らは，CAD 利用技術者試験，危険物取扱者試験，パソコン検定試験などの資格取得講座を開き，学生の資格取得の意欲は高いことを報告している．これら文系の学部や工学部は，資格と学部教育が直結していることは少なく，検定・資格取得は，上記の背景の①と⑤の要素が大きいと思われる．

実際に大学生の福祉住環境コーディネーター２級の2009年度受験者は，受験者の11%（4056人）であった[1]．なお大学生の合格率や学部などはデータ開示されてない．

当作業療法学専攻は，作業療法士の資格取得を目指しているので，業務内容や資格として福祉住環境コーディネーター２級はとる必要ないが，前述の河野の目的分類からみると，「③学習到達目標としての期待，

Akita University

④学習スキルや自信の獲得への期待の要素が大きい」の２点と共通するところがある．

実際に，この福祉住環境コーディネーター２級資格取得が講義実習に役立ちましたかの設問で，約６割が役立ったと回答しており，学習や臨床実習で役立っていることが分かった．そして，住まいへの関心の高まりは94％もあり，作業療法の教育内容としては好ましい結果であった．しかし，この受験学習は負担でしたかの設問で７割が負担と感じていた．これは個人差も大きいと思われるが，評価実習やレポートが重なることもあり，大変だったと思われる．大学教育のカリキュラム以外に自己学習するので，少し負担となるところもある．

福祉住環境コーディネーター２級の試験内容は，「普通」から「非常にやさしい」と回答した数を合計すると62％であり，試験内容レベルは適度なものであることが分かる．しかし，平成19年は，本作業療法学専攻の７月受験では合格率が44％と低くなっている．この年度の全国合格率22％も低く，これは出題方式や問題内容の傾向を変えたのが大きな要因だと思われる．そのよう状況でも11月受験では不合格者全員が合格しており，受験対策の効果が十分になされている．平成20年の７月受験では，81％が合格し，11月受験で不合格者全員が合格している．

７月受験では，３年生は専門教育が集中して入る学年でもあるので，評価法実習やその他のレポートがあり負担となっていることや，同時並行で講義実習としても住まいと福祉用具を学んでいくので，理解が不十分となっている学生もおり，７月受験の合格率が81％となったと思われた．11月受験では，これらの知識を既に学習しており，専門的な知識を学んでいたことや夏季休暇で再学習したことにより100％の合格率になっていると思われる．よって，作業療法士教育を終了していれば，難しい試験ではないと推察される．

11月受験から７月受験に移行させたのは，この７月の前期に住まいや福祉用具を学習していくので，自ら調べて学習する，グループで学習するなど課題解決型の教育視点の要素を重視したためである．資格をとることも重要であるが，この受験で学ぶプロセス，作業療法での意義を確認し，関心を広げていくが重要である．学生の福祉住環境コーディネーター２級受験の補助学習としてあってもよいかの設問で，あったほうがよい77％で，学習としての必要性の意義も認識しているようである．よって，11月から７月への移行は，学習目標の達成とともに，合格レベルまでに学習できると思われる．

グループ学習はどうでしたかの設問でも５割がよく，良くなかったが２割あった．これは互いに協力できた反面，担当箇所のまとめや学習時間が守れないなどグループ学習での役割をうまく果たせない学生もおり，短期集中学習の意義をもっと説明する必要もあった．グループ学習は，学生の自主性にまかせており，問題が起きた場合は，すぐに教員が介入するのでなく，これらの問題をグループ内で話しあい，原則グループで解決するように指導を行った．進行に問題のあったグループは，十分に解決されてはいなかったが学習は継続されていた．

このグループ学習は，最終目標の一つとして合格があり，個人的な目標でもある．よって，個人学習が前提のグループの参加であり，受験日より前の３週間は個人学習にした．しかし，グループで一緒に学ぼうとする姿勢は重要であり，進行においても学生同士で話し合い，解決していくことは教育としても意義がある．

吉田[6]らは，役割と責任を分担し，教え合う，サポートしていく学習としてのチーム学習の良さを指摘しており，社会生活においてもチームで活動することが多いので，これらの技能をみがくことが大切であるとしている．作業療法士もリハビリテーションチームで働くことが多いので，チームとしての学びは重要である．学生自身がグループにおける学習をした場合の自己認識や役割達成の意義を知ることは，作業療法士教育でも重要である．グループ学習が不十分なグループもあったが，教育の視点からは有意義であったと思われる．

福祉住環境コーディネーター２級資格取得ということだけでなく，大学教育として取り入れるためには，目的を明確にすることも重要である．しかし，一人で勉強するスタイルを好む学生，うまくグループ学習にとけこめない学生もおり，今後はグループ構成や勉強方法，介入の方法も検討していく必要もある．

７．結　　論

作業療法の専門科目と並行として平成17年度より，福祉住環境コーディネーター２級受験を補助教育として取り入れた．その結果，受験学生の60％が役立つと回答し，試験レベルの内容は，高水準でなく大学での教育水準としても妥当なレベルであった．資格受験なので少し学習負担となるが，住まいへの関心が高くなる，住まいの学習の必要性が高く認識され，教育達成目標に達成する手段としての効果もあった．グループ学習の効果については検討の必要性があり，学生の勉強法の配慮，進行についてもう少し介入するなども検討課題である．

福祉住環境コーディネーター２級受験は，補助学習

Akita University

としての教育効果もあることが示唆された.

引用文献

1) 福祉住環境コーディネーター検定試験情報 http://www.kentei.org/fukushi/
2) 箕輪裕子，坂東美智子：第５章住宅改修アドバイザー制度の動向と「評価」による支援の可能性．厚生省労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）分担研究報告書：55-66，2006.
3) 厚生労働省 老健局長通知　老発第0609001号 http://www. pref. kanagawa. jp/ osirase/ kourei/ 06kaigoyobou / top / youryou. pdf
4) 河野志穂：大学における資格・検定取得制度の現状と背景．大学教育年報　4 ：37-56，2008
5) 丹羽昌平，久保木功，土肥稔，その他：創造体験教育「創造・発見」の計画と実施　工学教育53-5：37-43，2005
6) 吉田新一郎，岩瀬直樹：効果10倍の学びの技法．PHP新書．東京．2007．p 90-146.

Incorporating attainment of Level 2 on the Residential Environment Coordinator for the Elderly and Disabled Exam as supplementary instruction

Masaji KINJO

Department of Occupational Therapy, Akita University Graduate School of Health Sciences

Akita University's Department of Occupational Therapy is oriented toward helping students qualify as occupational therapists, but its interests have broadened to housing and aids for the elderly and disabled. To more efficiently meet its educational goals, the Department began offering, along with the requisite specialized instruction, supplementary instruction in taking Level 2 of the Residential Environment Coordinator for the Elderly and Disabled Exam. Students wishing to take the exam can do so starting in 2005.

From 2005 to 2008, 94% of students took the exam and almost 100% passed. Preparation was done through group activities in order to provide a short, intensive course on material covered by the exam.

In order to study the effectiveness of this supplementary instruction, 50 students who took the exam from 2005 to 2007 were surveyed. Sixty-one percent of the students responded that the instruction helped with their coursework and clinical training. In addition, although studying was a burden since the exam was a qualifying exam, the burden was not substantial. Additionally, 94% of students had an increased interest in residential environments. While 51% thought studying in groups to prepare for the exam was helpful, 21% thought it helped little. Finally, it's clear that some steps to attend to students' test preparations and gauge their progress must also be studied.

Results suggested that incorporating the taking of Level 2 of the Residential Environment Coordinator for the Elderly and Disabled Exam as part of occupational therapy instruction, increased the effectiveness of that instruction.